

初妊婦の妊娠の受容に影響を及ぼす要因の検討

金谷 掌子

【目的】初妊婦の妊娠の受容に影響を及ぼす要因の検討。【方法】初妊婦を対象として、妊婦と夫・実母・同僚との関係性について半構造化面接調査を実施し（調査1）、この調査1に基づいて作成した妊娠の受容に関する尺度と、既存の尺度を用いて質問紙調査を行った（調査2）。【結果・考察】調査1は7名の協力を得て、妊娠判明時の自身の気持ちや夫・実母・職場との同僚との関係性の変化等について尋ねた。逐語録の質的なカテゴリー分析によって、初妊婦の妊娠の受容を促す要因として、①夫・実母・同僚から妊娠の受容をされること、②3者との相互作用において「赤ちゃんの認知」、「妊婦の尊重」、「新たな関係」が体験されること、③これらの体験を初妊婦が肯定的に認識することが示唆された。この調査1に基づき、妊娠の受容に関する尺度を作成した。調査2の有効回答者は68名であった。因子分析の結果、「自身の気持ち」に対しては「他者からの祝福・サポートを受ける経験に対する幸福感」及び「自身の妊娠に対する嬉しさ」の2因子構造、「夫・実母・同僚との関係性」に対しては「実母に対する委任の高まり・サポートの享受」、「夫による妊婦の体調の気遣い・サポートの享受」、「職場の子育て支援制度の有無」、「同僚への新たな気遣いによる低ストレス」の4因子構造が示された。要因間の関係性の検討を目的に重回帰分析を実施した結果、「妊娠の受容の不安定さ」には「実母との関係」、「夫との関係の不安定さ」及び「自身の気持ち」が関連することが示された。調査1で示唆された妊娠の受容に及ぼす要因のうち、①については、重回帰分析の結果及び「自身の気持ち」と「夫・実母・同僚との関係性」間で相関があったことから調査2でも確認されたといえる。しかしながら、②については、因子分析の結果からは確認できず、したがって③については検証できないと判断した。ただし、「自身の気持ち」は自尊感情と相関がなかったことから、初妊婦が妊娠及び妊娠した自身を肯定的に受け入れるには、他者との関係こそが重要であることが示唆された。

児童養護施設みちのくみどり学園の養育史に関わる研究 —1957(昭和32)年から1967(昭和42)年の療育を中心に—

高橋 伸広

【研究目的】

社会福祉法人岩手愛児会の基本理念「子どもこそ原点」基本方針「先駆的」「開拓的」「実験的」のルーツを探るべく、法人設立運動から設立後10年間の法人運営、施設実践を明らかにし、考察を加えた上で、今後の法人運営、施設実践に役立てたい。

【研究方法】

歴史研究に基づく、文献（史料）研究と、当時法人・施設に携わっていた元役職員、元利用者と現職員への聞き取り調査により、法人設立の経過を追い、施設開設後から10年間の施設運営、実践の特徴を明らかにする。

【結果と考察】

戦後、岩手県において結核などの病気で学校へ通いたくても通えずにいた長期欠席児童生徒の数が、全国で2番目に高い実態があった。当時設立されて間もない岩手県共同募金会および岩手県社会福祉協議会はこの実情をふまえ、お年玉年賀はがき寄附金を利用し、結核児童に対し医療、教育、福祉の機能をあわせもった「結核児童療育施設」設立構想を打ち出し、国や県に働きかけを行なった。陳情は失敗に終わるも施設は虚弱児施設として開設される。開設当初は結核児童に限定した療育が中心だったが、慢性疾患等による入所が増え始めると、それまで「安静度」によって治療方針から生活・教育指導が決まっていたのが、入所児の個々の病状が違えば、性格も行動範囲も違い、その枠にあてはめることが難しくなった。1967（昭和42）年石川敬治郎が施設長に就任し、全職員に「子ども第一主義」を唱え、施設は法人のためにあるのではなく、子どもや社会のためであると述べ、その精神は今でも法人の基本理念として継承され、施設の開所時に精力的に開設運動をした姿勢とともに、現在の社会福祉法人岩手愛児会の基本理念に通じていることが理解できた。